

前川文夫先生を追憶して

古 谷 雅 樹 (植物)



前川先生は東大にまだ在職中から糖尿に悩まされておいでで、毎日毎日、一日も欠かさず御自分でインシュリンの注射をなさりながら、常人では出来ないような御活躍を長い年月にわたってなされていらっしゃいましたことは、まだ御記憶の方もあろうかと存じます。この糖尿病が原因で数年前に、丸善で本を御覧になっている折に、軽い脳血栓を生じて、突然会話が出来なくなり、さらに帰りの電車で片足が不自由になられたため、一ヶ月ほど慈恵医大の病院に入られておいででした。幸い最近では再び海外へ植物採集へ出かけられるほど回復され、周囲の者も一安心致しておりました。ところが昨年9月に山形県月山へ御家族と植物を見に行かれ大変楽しまれたそうですが、帰京された夜に腹痛をおこされて入院されました。爾来、ずっと療養を続けられましたが、結局1月13日に胃がんのため御亡りになりました。先生は明治41年のお生れでしたから、まだ75才で、本当に

残念な事で御座居ました。

前川先生は、旧制府立四中から第八高等学校を経て、昭和4年4月に東京帝国大学理学部植物学科へ入学されました。それ以来、昭和44年に停年で御退官なされます迄、四十年の長い期間を、この理学部で、学生、助手、講師、助教授、そして昭和31年以来教授（植物学第三講座担当）として過されました。また、昭和31年から3年間は、理学部附属植物園長に併任されました。

植物学を学ぶ者の中でも、前川先生ほど沢山の植物に深く接し、植物に情熱を注がれた方は希であると存じます。どのような契機で前川先生が植物学に志を立てられたのか、またいつ頃から植物に興味を抱かれたのか、御家族や前川先生と同じ世代の諸先輩におうかがい致しましたが、御答えは得られませんでした。前川先生に直接お尋ねする機会を永遠に失ってしまったことを、本当に残念に思います。八高時代には園芸部で活躍され、東大へ入学された頃には既に日本各地の天然記念物について深い造詣をお持ちであったと聞いておりますので、かなりお若い時代から次第に植物に対する関心を深められたのではないのでしょうか。

前川先生が理学部の学生であった頃は、まだ植物学教室は小石川植物園にありました。クラスメートの亘理俊次先生から承りますと、当時から先生は植物の形を丹念に黙々と、同じ資料を上から下から、そして右から左から、画に描かれていたのが、大変印象的であったという話でした。この精密で且、鋭い観察の蓄積が、前川先生の学問の出発点であったことは疑う余地がありません。先生の御研究は極めて多岐にわたっておられますが、それらはいずれも植物の形に基くものであり

ます。その御仕事の進め方は他に類をみない独自のものであり、それは御自身の眼を通した余人の追従し難い洞察力による観察に加えて、天賦の感性和詩人の魂から発する一種の「ひらめき」に依る理論であったと申せましょう。前川学説の特徴は、托葉起源論、古赤道分布論、ライフワークであった「ギボシの系統論」などいづれも考えて考えぬいた思考の深さにありましたが、そのような考えぬく習慣は、昭和14年から18年まで、本も資料も何一つ無い中支の戦場で銃を担ぎながら養ったものだと、先生自ら語られたという事です。

前川先生は植物分類学者としての卓抜な知見に加えて、御父君の影響も受けて、漢字や民俗学についても深い造詣を御持ちになり、日本の植物名（和名）の考証に大きな業績を残されました。ま

た、先生は自然の現象に非常に広い御関心をおもちでしたので、幾つもの構想が先生の中に平行して育っていたように見えます。このことと多少関係があるかも知れませんが、前川先生の門下生は現在随分広い様々な専門分野で活躍されておられます。

前川先生は大へん心のやさしい思いやりのある方でした。そして、今は死語になってしまいましたが、非常に親孝行な方であって、学生時代には病床の母君の療法に必要な食事分量を毎日測ってから登校なされたと言うことでした。

前川先生の思い出は、私共の心に盡きることなく浮んで参りますが、ここに先生の御遺徳をしのびつつ、謹んで御冥福を祈りたいと存じます。